
思い通り

聖流

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い通り

【Nコード】

N7300C

【作者名】

聖流

【あらすじ】

普通の小学生、遠藤光。道に迷い、行き着いた場所、『思い通り』何でも思い通りのことができる通り。笑いあり、冒険ありの話。

ブローグ

4時間目。そろそろお腹が空いてきたっていうぐらいの時間。普通ならのんびり授業を受けるんだけど、今日は違う。なぜなら、国語の教科書忘れた・・・おまけに、まる読み。確実に、あたしのトコに周ってくる。

あたしが机の中をゴソゴソ探してるうちに、本読みの番が近づいてきた。

余計に焦るあたし。ヤバイよ・・・どーしょ・・・

ついに、あたしの番が回ってきた。なかなか読まないあたしに、先生が「どうしましたか？」と聞く。決して怖い先生、っていう訳じゃないケド、何か言いにくい・・・

「えっと・・・教科書、忘れました・・・」弱々しく言ってみた。だけど、やっぱりダメだった。その先生は少し怒ったようで、

「どうしてですか？」と聞いた。

「昨日、ランドセルに入れるのを忘れました・・・」

「どうして気づかなかったんですか？」

「あ？？この先生、頭ワリー。普通、分かるだろ。」

「確認しませんでした。」

「そうです。甘えたことをしないように。では、隣の人に見せてもらいなさい。」

・
最悪。どうせなら、パツと教科書が現れてくれたらいいのに・・・

これって、普通に思うことでしょ？だけど、あたし、このとき心の

中では「そんなのあるわけない」って思ってたよ。

だって出てきたらフツーにビックリするし、現実になんか起きたら、ヤバイじゃん。

でもね、それが普通に叶っちゃうトコってあるの。

冗談だろ、って思った人いるよね？あたしだって、最初はそう思ってたよ。でも・・・変わったの。『思い通り』っていうトコに行ってから

第1話

あゝあ．．．今日は、ついてない。って言っても、教科書忘れた
ただけけど。

帰り道、ぼんやりと歩いていたあたしは、誰か知らない人に話しか
けられて、我に返った。

「ねえ、山田っていう人の家、知らない??」

「いえ、知りませんけど．．．」

「そつか．．．君、何年生?」

「6年生ですけど．．．」

「へへえ。胸、大きいね」

何言ってるの、この人。大体『胸大きい』って．．．
胸を触ってくるので、気持ち悪くなり、あたしは帰ろうとした。

でも、相手は大人の男の人。

子供が勝てるわけも無く、追いかけてきた。

怖くなって、あたしは走り出した。

でも、頭の中は真っ白で、アイツに追いつかれることだけを恐れて、
ただ必死に走った。

．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．疲れた．．．

っていうか、ココどこ??

気が付くと、全く知らないけど、でもたくさんの人が行き交う、賑
やかな通りにいた。

とりあえず、歩いてみた。

でも、ここどこだろ．．．?地図とか無いかな．．．

そう思ってたキョロキョロまわりを見てみると、さっきは無かったは
ずなのに、ぱっと地図が現れた。

地図を見てみた。そこには【思い通り案内板】と書かれていて、そこにはいろいろな店の名前が書かれてあった。

そこまでは、普通の案内板と同じ。でも、あたしは見つけた。普通では有り得ない言葉を。

【これは、あくまで案内です。実際には在る店と無い店があります。

】これって、どういう意味？

第2話

どうしたらいいのか、全く分からなく、困っていると長い髪のあたしと同じくらいの年の子を見た。見覚えがあるから、近づいて話しかけてみた。

「はあ・・・はあ・・・ね、ねえ・・・」

走ったせいで上手く言葉が出なかった。

でも、彼女はゆっくりと振り返った。

そして、少し驚いたような顔をした。でも、あたしが思うに、ほとんど顔に変化が無かった。

「あ、柴崎美夏しばさき みか・・・」

見覚えがあるな、とは思ったけど、まさか美夏だとは思わなかったから、内心ビツクリした。

「そうだけど、何か用？ていうか、どうしてあなたがココにいるの??」

「え・・・？迷い込んだ」さすがに、胸をさわられて逃げてきた、何て言えない。

「どうやって入ったの？」

「分かんない。気がついたらココにいた。ていうか、何でさっきから質問ばつかなの？」

「あなたがココに居るのは、変だから。」

急に、意味の分からないことを言い出した。

そもそも、あたしは美夏とはあまり喋ったことが無い。「美夏」何て言っって呼び捨てにしているけど、それは流れて普通になるものだし。

「あのね、ココは普通の人は入れないの。特に、あなたみたいな人は。」

「え？それ、どういうこと？」

「あたしは、あなたの家庭事情とかよく知らないけど、でも、あなたは1人じゃないでしょ？学校とか、家とかで。」

あたしは考えてみた。

確かに、1人じゃないかもしれない。

でも、何か、上辺だけの友達、ってカンジがする。

家でも、確かに1人ではない。ただ、会話とか少ないし、最近お母さんとお姉ちゃん、ケンカばっかだし・・・だから、あたしは、あまり家族と話すコトが少なくなった。イロイロ考えて、あたしの答えは「分からない」だった。

そのことを美夏に言っていると、何も言わなかった。

第3話

あたしと美夏の間には、何も無い時間が流れる。

「とりあえず、役所に行こ。そこで、出口を探してもらおうの。」

その言葉、特に「出口を探してもらおう」という言葉に、あたしは反応した。

「役所に行くのは賛成だけど、出口を探してもらおうなんてヤダ！まだ居たい！」

「ダメ。そんなことしたら、光^{ひかり}、消えてしまうの。」

「……え……？『消える』？あたしが？そんなの、有り得ないって……」

「消えるってどういうコト？」

「光はまだこの世界に慣れてない。だから、ココに居られる時間が限られてる。その時間は【1時間】」

1時間……あたしが思い通りに来てから今までで、大体10分前後……

残り時間【50分】

【50分】って、長いの？短いの？

そうやって悩んでる間に、美夏の話は続く。

「1時間を上手く使って、自分の思い通りの結果を生むか、それとも下手に使って自分の思いとは全く逆の結果になるかは、光しだい。」

結局、自分で何とかするしかないんだ……

だって、あたしの人生なんだもん。

「そっか。役所行く。」

あたしがこう言つと、ただ頷^{うなず}いて、黙^{もく}つて歩き出した。

「そういえば、美夏つて家どこ？また遊びに行きたいし・・・」

「私の家は思い通りにあるから、もう来ることはできない。ただ、この住人になれば、自由に出入りできる。」

「うそ！！あたし、ここに住みたい！」

あまりにも幼くて、単純な返答だった。それで、美夏が納得するわけない。

「この住人になるには独りじゃなきゃ住めない」

え・・・じゃあ、美夏は独りなの？

第4話（前書き）

やっとココまで来ました・・・

光の同級生、美夏。彼女がどうして思い通りに居るのか、その理由がちょっとだけ明らかになりますヨ

第4話

あたしは美夏のコトはよく知らない。

でも、両親が事故で亡くなったのは知ってる。

だけど、その後美夏は親戚の家に預けられて、それでこの学校に来た。

だから、別に独りじゃないって思ってた。

「美夏のお父さんとお母さんが死んじゃったのは知ってるけど、その後親戚の家に預けられたんでしょ？」

「そう。」

「だったら、別に独りじゃないじゃん。」

「預けられただけ。親戚の叔父さんと叔母さんは、何かって言うことに当たってくる。それに、あの2人には今年受験の子供がいて、私にかまってられない。」

そこまで全然知らなくて、ずっと『美夏は、両親がいないけど親戚の家で楽しくやってる』って思ってた。

ホントは全然楽しくなくて無いはずなのに
だから、美夏はココに来れたんだ……

だったら、あたしも居たい。無理矢理独りになってもいいからココに居たい。

「美夏！どうやってたら、ココに居られるの？」

「そんなバカなコト言ってるで、早く役所に行って帰る手配してもらわなきゃ。」

なんと！！話をずらしましたよ、この人！！

思い通りを歩いてみて思ったんだけど、ここってスゴイ……
水が飲みたいなって思ったら、ミネラルウォーターのペットボトル
がいつの間にかあたしの手にあった。

それだけじゃない。人々が行き交う賑やかな場所に行くと、色んな

とこで、色んな物がイキナリ現れてる。そのことを美夏に話すと、
「当たり前。ココはそういう場所なんだから。」って言われた。あたし、このとき、何言ってるのか全然理解できなかった。でも、あの案内板・・・アレに、ちゃんと書いてあったんだ・・・
役所は、レンガ造りの洋風な建物で、すごく大きかった。建物の周りには、樹がたくさん立っていた。
役所の中は、たくさんの人。ホールと思われる場所の真ん中には、これまた大きな噴水。

噴水のある場所から真っ直ぐ行くと、大きな扉がずらりと並んでいた。扉には看板があり、看板には『住民課 住民登録・住所登録 結婚・離婚の方』とか、『組合課 新団体（組合）設立・団体の削除・団体合併の方』、『医療課 病院検索または、ご案内の方』などいろんな看板がある。

でも、美夏はそんなものには目もくれず、奥の方へと進んだ。
着いた場所、そこはホールとは違って、人も少なく、何かちよっと暗い、不気味な場所。そして、看板には『修正課 思い通り追放・現界に帰還』と書いてある。

言っとくけど、あたし、言うほどバカじゃないよ。この看板の意味ぐらい、理解できる・・・

あたし、元の世界に戻っちゃう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7300c/>

思い通り

2010年10月28日13時38分発行